

海神会だより

お知らせ事項：主要項目・頁を下記に記載

- 2頁 神戸大学付属図書館 海事科学分館からのお知らせ
- 3頁 第11回 神戸大学ホームカミングデイ記念式典
田端仁一氏（S56年卒業 N26期生）
講演：「異業異職」航海士から銀行員債権者から債務者
- 9頁 最近の海事博物館
- 15頁 海神会会費納入のお願い
（送付封筒の宛名ラベルに納付状況が記載されています）
- 16頁 平成29年海神会理事会・総会・懇親会のご案内



神戸高等商船学校・神戸商船大学・神戸大学海事科学部

〒658-0022 神戸市東灘区深江南町5-1-1 神戸大学深江キャンパス内 海神会事務局

同窓会誌「海神会だより」は海神会ホームページ(<http://www.fukae.org/>)の"同窓会だより"からもご覧いただけます



深江キャンパスの第二世紀に向けて

－真に重要なミッションを果たすため、発想の転換を見極める－

海事科学部長・大学院海事科学研究科長

内田 誠(機関学科26期・南寮304)

2015年10月に海事科学研究科長・海事科学部長の職責を担い、めまぐるしく1年3月が過ぎ去りました。就任直後の本誌(Vol.13)における挨拶で、「育成する海技者の質の高度化をさらに推し進めることが、中核を含む海事科学分野全体に対する社会による評価をさらに高め、ひいては海事科学研究科・海事科学部の進展に大いに貢献すると確信します。」と述べましたが、この強い思いは不動であるものの、国立大学法人を取り巻く環境変化への適切かつ積極的な対応を見据え、真に重要なミッションを果たすため、発想の転換を見極める事が求められていると、同時に強く感じています。

この間、大学の機能強化の流れの中、第3期中期目標期間(2016年度～2021年度)が始動し、継続的な定常予算の削減と競争原理が激化する中、機能強化実現のための検証可能な具体的指標を設定して、目標達成に向かって進みつつあります。昨春に神戸大学特別顧問・海事科学研究科特別教授に就任して頂いた前IMO事務局長・関水康司先生(九州在住、概ね月1回登学)からの助言及び示唆、海神会有志から昨夏頂戴した貴重な提言、および海事クラスターの諸先輩からのご意見を参考に、私に許される任期の限り、深江キャンパスの第二世紀に向けた進展を導くため邁進する所存です。大羽真治先生による「常に気力と体力を」の教えに少しは近づきつつあると自負し、心身の環境を与えてくれた両親へ感謝しています。



2017年4月には、2013年海事科学部改組の学年進行による海事科学研究科(大学院)の改編と、博士課程前期課程(修士課程)の入学定員増(学内資源再配分による15名増、一学年75名)を予定(2016年12月末頃、確定の見込み)しています。2015年10月に深江キャンパスに設置された全学センターKOBEC(海洋底探査センター)等との連携により、海洋人材(海技士を含む)育成のミッションを果たす方針です。「教育研究の活性化につながる人事・給与システムの導入、学長のリーダーシップ・特色を一層伸長するガバナンスの強化」の流れの中で、学域・学系制の導入、教員定数管理からポイント数管理への移行、人件費抑制・学長裁量枠へのポイント供出など、適切に対応して乗り越えていくため、構成員とステークホルダーの理解と協力による組織力向上と体制強化が不可欠です。

1917年9月設置認可の私立川崎商船学校を起点に、今年は海事科学部創基100周年を迎え、同時に、神戸開港150年、2017海フェスタ神戸に関する諸行事の開催が予定されています。創基100周年募金事業へのご協力を重ねてお願いすると共に、海事思想・文化の普及による海洋人材確保と育成にご尽力賜いますよう、よろしくお願い申し上げます。

以上



海神会会長挨拶

海神会会長 N13期 久保 雅義



1. 入学生に対しての同窓会案内、入会手続方法を他学部との連携で調査した結果を参考にした新たな方法で実施した。平成30年度の入学生からは神戸大学各学部で行っていた入学手続きが大学の一括郵送化手続変更に合わせて実施予定である。同窓会の役割も最近は教職員学生との連携活動の機会が増え大学の発展、活性化に一体となり寄与し、実績も上げてきている。このため変更後の制度に支障が生じないように事前に充分な対策を講じる必要がある。
2. 寄附制度の定着
数年前より徐々にではあるが会員の皆様のご理解で定着して来ている。
3. 10年毎の同窓会開催への支援と会員住所の掘り起しのお願いは継続して行っている。
4. 卒業生を送り出す時は、同窓会の世話役をクラス担任に決めて貰い、以後の連絡はその人と連絡を密にする。これにより名簿管理も相当楽になり、同窓会の連携も深まると考えられる。
5. 海神会から海事科学部への提案書の提出

初めての試みであるが、海神会から海事科学部への提案書の提出を行った。この提案書をもとに、内田研究科長、森本関東支部長、赤塚理事、久保会長、神吉事務局長の5人が出席し海事科学研究科長室で意見交換を行った。有意義な意見交換が出来たと考えている。同窓会として気付いた点を参考意見として提案するが、最終決断は海事科学研究科が責任ある立場として決断してもらうことになる。提案者側には、この点は十分節度を弁えた態度が望まれる。今回初めての意見交換であったが、今回の事例が今後の良い慣例となればと考えている。

6. 現在の同窓会の運営・活動の財政は会員の皆さんの終身会費、寄付のみに頼っている状況です。充実した活動実績を上げるにはまだまだ財政的にも充分ではありませんので、今後とも、海神会にご理解賜りご支援の程よろしくお願い申し上げます。

神戸大学附属図書館海事科学分館からのお知らせ

卒業生貸出のご案内

附属図書館では、本学卒業生・修了生の学習・研究活動等を支援するため、卒業生貸出サービスを実施しています。初回利用時に登録が必要です。

- 対象者● 神戸大学又は神戸大学の前身となる大学等を卒業・修了・単位取得退学された方
- 登録受付日時● 平日 9:00-17:00
- 登録時必要書類● ・本人及び現住所を確認できる身分証明書(全員)
・卒業を証明できる書類(2000年以前の入学生で同窓会名簿に掲載のない方のみ)

- 貸出冊数● 6冊
- 貸出期間● 3週間
- 利用証有効期限● 発行年度末(以降更新)
- 通常期開館時間● 平日 8:45-20:00 土曜日 10:00-18:00
- 休館日 日曜・祝日 本学創立記念日(5/15)、
年末年始(12/28-1/4)
※休業期・試験期は変更あり

詳細は下記ホームページにてご確認ください

※お問い合わせ先※

TEL:078-431-6239

E-MAIL:wlibsvc@lib.kobe-u.ac.jp

<http://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/list/kaiji/>



「異業異職」航海士から銀行員債権者から債務者

S56 神戸商船大学卒 田端 仁一

ただ今ご紹介に与りました昭和56年(1981年)に神戸商船大学商船学部(現在の神戸大学海事科学部)を卒業しました田端でございます。

まず、講演の前に、私自身が未だ修養の身であるにもかかわらず、このような光栄な機会を与えて頂いたことに対し、武田学長様はじめ関係者の方々に心より御礼申し上げます。また、本日の講演に際し、私自身が仕事以外での講演には不慣れなため、お聞き苦しい点多々あると思いますが、平にご容赦願います。さらに、話が大きく脱線する可能性がありますので、できる限り脱線せぬようメモを手元に用意させて頂いていることをお許し下さい。では、本日の講演を始めさせて頂きたいと思いますので、30分程おつきあい下さい。

まず最初に、本日の講演のテーマ「異業異職」ですが、一般的に使われる常用熟語ではなく、本講演のための「造語」であります。その意味するところは、「読んで字の如し」の通りで「異なった業界や業種と異なった職位」という意味です。私は、本学を卒業して35年になりますが、その間、4回、職を変えておりまして、その内の3回が、それぞれ全く異なった業界職位であります。

本日のパンフレットに私の略歴が掲載されております通り、本学卒業後、最初の就職は、反田産業汽船での5年半。二回目の就職が、外資系金融機関であるシティバンクでの約23年間。三回目が、更生会社パシフィックホールディングス3年間。四回目が、更生会社三光汽船で、現在に至っております。

35年間において船会社／船員、金融機関／銀行員、破産村／管財人と三回の「異業異職」を経験し、それぞれの仕事にかかわるエピソードをすべてお話することは難しいと思いますので、これまで色々な方々に必ず聞かれた質問が「なぜ辞めるのか(辞めたのか)、なぜ転職した(できた)のか」という質問でしたので、本日はその「なぜ」について一部エピソードを交えながらお話させて頂きたいと思っております。

最初は「なぜ神戸商船大学だったのか」私のすべての原点はここから始まっているのですが、その答えは、「故郷の鹿児島を出て、知らない世界を見たい」というものと、「サラリーマンじゃない職に就きたい」の2点で、働いた経験もない少年が漠然と描いたイメージを大学受験時に実現させたというのが理由です。

ここで後者の「サラリーマンじゃない職に就きたい」というのは、父親に対し「非常にまじめなサラリーマン」という強いイメージを持っていたがための反動だったのかも知れません。「まじめさ」が悪いというのではなく、むしろ、「まじめさ」において父のレベルに到達できないだろうと思っていたからこそです。

余談になりますが、私は大学受験時、第一志望を東京商船、第二志望を神戸商船にしていたのですが、たまたま見たテレビに神戸商船大学の学生が制服姿で出演していて、非常に格好良い姿が印象的で、急遽、神戸に大きく舵を切ることとなりました。ただ、甚だ短絡的ですが、このことが、これからの私の人生の重要な第一歩になったと思っております。そして、無事、念願の神戸商船大学に合格し、当時全寮制であったため、人生初めての寮生活を経験し、また、体育会のボクシング部での活動に全力を傾けておりましたので、学業については自慢できるようなことはほとんどないのですが、唯一、卒業論文の学内発表で教室が熱気に満ち溢れていたことは鮮明に記憶に残っております。私の卒論のテーマは「女性の母性保護について」で、労働法の一部である船員法を担当されていた戸田教授のご指導の下、卒論に取り組んでいたのですが、折しも私の卒論の発表の年に東京商船において女子禁制が破られ女子学生が初めて入学し、当然ながら次は神戸商船にも女子学生を入学



させるべしとの風潮が学内で起こっておりました。

戸田先生は、男女雇用機会均等法は未だ制定されておらず、実際には4年後の1985年に制定、翌86年に施行されましたが、また、そもそも男女平等の定義も不明であるにもかかわらず、女子学生を受け入れるのは時期尚早であるという考えで、教授会でも少数の反対派であったことから、また、私の卒論は戸田カラーが色濃く反映されていたため、私の卒論発表が盛況となった次第です。

卒論発表にあたり、戸田先生から「様々な先生方々から厳しい質問や意地悪な質問を浴びせられるであろうから、それらの質問には「調べてない」の一点張りを通し、決して余計なことを言ってはならない」という極めて明快な助言があったため、質問の集中砲火を浴びながらも何とか発表を無事に終了させることができました。日本丸での遠洋航海が終了し、神戸商船を無事卒業し、いよいよ念願の船員として船会社に入社し、スエズ運河とパナマ運河を通る西まわり世界一周航路の7万トンの貨物船に航海士として乗船しました。

ここで、余談ですが、反田産業汽船に入社した経緯についてですが、日本丸で最後の遠洋航海を東京で終え、その足で、船会社を数社訪問した後、その報告を行うために大学へ行ったところ、当時の担当教官であった鈴木三郎教授から開口一番「君の就職先は既に反田産業汽船に決まっているのだから、もう就職活動など一切行方必要はない」と言われ、「しかし、そんなこと言われても反田産業汽船なんて聞いたこともないので、船会社ですか?」と返したところ「だったら今すぐここから電話して聞きたいことを直接聞けば良い」と言って、直ぐに先生の部屋から会社へ電話を入れ、いくつか質問した後、その場で入社が決定しました。まるで、狐につままれたようで、当時の電話をかけたシーンは今でもよく覚えております。

航海士として11か月乗船後、4か月の休暇中の2か月目に会社から急遽呼出しがあり、陸上勤務となりました。陸上勤務では、外国人の船員を扱う外国船部を皮切りにその後企画業務部、経営企画部と社内異動を経験し、約4年半が過ぎたとき、シティバンクへ転職することとなりました。

ここで次の「なぜ」ですが、「商船大学まで出て、念願であった船員をなぜ辞めたのか」当時プラザ合意後、円高が進行していたため、海運界においても日本人船員からコストの安い外国人船員への移行が始まっておりました。

そのような厳しい環境の中、陸上勤務での仕事に対し不平・不満があったわけではなかったのですが、船長になることを最終目標としていたため早く船に戻してほしいと常々会社へ希望を出しておりましたが、会社の合理化案をまとめる経営企画部に在籍し、会社の実情が理解できるようになり、「今後、自分は船員として会社に必要とされるのか、また、会社のためになるのか」と自問するようになり、

「船員を辞めるなら、船への未練を断ち切るために海運界とは決別しよう」と決断した次第です。

それでは「なぜ、米国の金融機関なのか」ですが、反田産業汽船の当時のメインバンクは日本興業銀行（現在のみずほ銀行）でした。前述したように当時円高により海運・造船不況真っ只中で、日本興業銀行のみならずすべての債権者が、海運界の市況・景気動向並びに会社の業績に神経質になっており、担保価値の査定や経営状況の説明を求めてきておりました。

当経営企画部で合理化案や会社の業績予想等の作成に携わっていた関係で、「円高は我々が引き起こしたものではありません、また、十分な担保を銀行へ提供し、さらにコスト削減に必死に取り組んでいるにもかかわらず、どうして銀行はこのような厳しいことを言うてくるのか」という疑問から、「海運界から離れるならば、逆サイドの債権者である金融機関から債務者を見てみたい」というおぼろげな思いから金融機関への転職を目指すこととなりました。ただ、反田産業汽船での4年半の陸上勤務で様々な部署を経験させて頂いたことが銀行員や管財人、現在の会社経営に明らかに役に立っていることには疑う余地はありません。

では「なぜ米国の銀行であるシティバンクに転職できたのか」ですが、イギリスで金融自由化いわゆるビッグバンが始まり、当時の橋本首相が日本版ビッグバンを始めると宣言したことに起因し、外資系金融機関が大挙して日本に進出し始めておりました。その頃はまだまだ日本の大手企業においては中途採用などまれで、ましてや銀行においては皆無でした。そのような状況で、新聞の求人欄に外資系金融機関が多数出ていたため履歴書の送付先が外資系にならざるを得なかったのです。

また、反田産業汽船の当時の反田社長は、東京商船の同窓会の重鎮であり、日本郵船の関連会社だった反田産業汽船とは別に数社の船舶保有会社やホテル・旅行会社を独自に所有しているオーナーでしたので、オーナー企業とは違う社風で、グローバルにビジネスを展開しているような組織で、あわよくばメジャーリーグでプレーしたいとの夢のような思いから、シティバンクの求人欄を見て、履歴書を送付し、採用された次第です。

ここで余談ですが、シティバンクでの入社試験の面接時、シニアのアメリカ人（彼はベトナム戦争を経験していた人でした）との一対一の面接時に「もしチャンスがあれば、もう一度シティバンクへの入社にチャレンジしたいと思っているが、何を勉強したらよいか教えてほしい、英語なのか金融知識なのか」と質問したところ、彼からの回答は意外なもので「シティは世界100か国以上に支店や子会社があり、世界中に何十万人もの銀行員がいる。その中で在日支店は、日本で儲けなければならない。そのためにも日本語の読み書きができることが重要である。英語の読み書きはできても日本語の読み書きができない外人は私を含め世界中にたくさんいる。次に、金融の経験や知識を持っている人はシティの中に大勢いるので、むしろ、彼らが経験したことのない業種や金融以外の知識を持っている業界の人を必要としている」と即答してくれました。後々、この会社の精神が、私を採用した理由だったのだらうと思います。

シティバンクには、22年8か月在籍しましたが、入社当時こそ、銀行の内外で「スエズ運河とパナマ運河を通った銀行マン」と珍しがられましたが、日本の会社と企業風土も違い、また、悩みなどを相談できる先輩後輩も皆無で、さらに金融知識はゼロの状態で、船員のライセンスを捨てて退路を断っていたので、精神的にも非常に厳しい状況でした。英国で始まった金融自由化（ビッグバン）の影響を受け、米国においても60年以上続いていたグラススティーガル法（銀行業務と証券業務の分離）が廃止され、シティバンクのような商業銀行とソロモンブラザーズのような投資銀行の合併により、巨大なユニバーサルバンクが誕生しました。ビジネスチャンスが格段に広がった反面、厳しい競争に晒された、銀行の経営方針や人事制度・評価も劇的に変わりましたので、即戦力の中途採用者も増えましたが、反面、転職する人や解雇される人も増え、常に緊張した状態で仕事をしておりました。

私の在籍した法人金融部門は、一般的な営業部門が行っ

ている会社の与信に対する融資業務ではなく、資金ニーズのある会社自身の事業や資産から生み出される将来のキャッシュフローに対し、資金を提供できるような仕組みをつくり、融資を実行することを主な業務としておりました。

法人金融部門在籍中は、世界の主要な航空会社向けへのファイナンス、債務不履行状態でのブラジルのパルプ会社やアルゼンチンの水力発電会社向けへのファイナンス、後に国内最大となった投資信託ファンドへの組成提案、クレジットカード債権の証券化など様々なファイナンスを手がけましたが、その中で最大の案件がソフトバンクによるボーダーフォンの日本での携帯電話事業の買収案件でした。買収総額は、1兆5千億円強で、通常の融資という形態での資金調達はほぼ不可能でしたので、将来の携帯事業から生み出されるキャッシュフローに対するファイナンスで「事業の証券化」という新しい手法で、日本及び欧米の金融機関を巻き込んでの資金調達となりました。

華やかな成功話の反面、必ずしも顧客の与信だけでファイナンスを行うのではないため、資金の流れを変えたり、また、将来のキャッシュフロー予測と現実のキャッシュフローがどの程度乖離しているのか、さらに、乖離の程度によってトリガーを設定し、常時モニタリングしなければならず、場合によっては、経営陣へのヒアリング、追加での担保設定等々、債権者としての立場から顧客（債務者）に対し、非常に厳しい対応を行わざるを得ない部門でしたので、常に緊張感を持って、営業部門のように顧客と和気あいあいと仲良くしていくようなことはなかったです。

そのような状況において、「なぜ23年間も勤めたシティバンクを辞めたのか」そして「なぜ管財人になったのか」ですが、前者については、2008年に「リーマンショック」が起こり、優良・不良資産の売却等のリストラが加速度的に始まりました。そのような状況下、人員整理や経費削減でコストの見直しを進めながら地方自治体向けの新規ファイナンス案件獲得に成功したのですが、ニューヨーク本店より新規案件に対する評価が思いのほか低かったため、このままシティバンクに在籍しても自分自身が何らの価値も生み出さない存在になるのではないかと思っていた矢先に、アメリカのヘッジファンド（ハゲタカファンド）から更生会社の管財人の話があり、管財人という役割についての知識もないにもかかわらず、市場環境も変わりシティバンクも今後大きく変わるであろうとの思いから、私自身も変わるには良い機会だと腹を決めた次第です。

ちなみにその最後の新規案件は、関西地方の地方自治体向けのごみ焼却施設に係るプロジェクトファイナンスで、神戸商船大学時代の同期生（彼はごみ焼却施設の製造メーカーの部長でした）から相談を受けた案件であり、シティバンク内において案件獲得した時点では低評価であったにもかかわらず、皮肉にも年間最優秀案件（ディールオブザイヤー）の一つに選ばれた案件でした。

後者の「なぜ管財人になったのか」については、不動産業や不動産ファイナンスの経験が全くないにもかかわらず管財人に選任された理由として、2点考えられます。まず、1点目は、複数の外資系ファンド以外で財務基盤の安定した同業者がスポンサーとして現れなかったこと、2点目は、債権者側である金融機関に23年間在籍し、債務カット等の交渉にあたる相手方の業界事情に詳しいであろうということが理由だと思われます。

ただし、シティバンクを辞める決心をした時点においては、ファンドは更生会社のスポンサー候補の一社にノミネートされただけに過ぎず、仮にスポンサーになったとしても更生計画を立案し、その計画が債権者の賛同を得る必要がありました。さらに、更生計画に基づき、債権者へ債務の弁済を行いながら、会社再建を進め、債権者への弁済を終結させなければならないということをシティバンク退社後に知った次第です。まさに、タイトルだけで中身のシナリオがないアドリブのみのドラマの始まりでした。

平成21年（2009年）11月末日にシティバンクを退社し、翌12月中旬にファンドがスポンサーに選ばれ、直後に東京地裁民事八部により管財人に選任され、ついに破産村へ足を踏み入れることとなりました。

管財人第一日目の辞令交付時に民事八部の部長に「田端さん、一度管財人を引受けたら辞めたくても辞められませんかよ、頑張ってください」と言われ、直ぐには意味を理解できませんでした。後日、その意味が理解できるようになり、一時的に管財人を引受けたことを後悔した時期がありました。

多数の債権者、裁判所の名代である法律家管財人団、スポンサーであるヘッジファンド並びに会社に在籍中の従業員の4者との信頼関係の構築が急務であり、当初は、それぞれと信頼関係がなかったため四面楚歌の状態の中で、管財人が全ての最終決定権を持っており、その責任の重さを痛感しました。特に債権者への対応は、これまでの立場と真逆の債務者となり、すべての債権者へ平等の対応をしなければならず、日々多数の債権者への対応に追われて時間ばかりが過ぎていくような状況でした。しかし、半年が過ぎたあたりから、債権者をはじめとする4者と信頼感が徐々に増してくると状況も変わってきました。すべての利害関係人に真摯に対応することが如何に重要であるか身に染みました。そして、当初5年の更生計画を半年の2年半で終了させることができ、無事退任となりましたが、その退任の日に「きまじめな」父が他界したのは、偶然の一致なのか、何らかの運命を感じざるを得ませんでした。

その後、半年ほどしてから、30年前に船員のライセンスを捨て、海運界と決別したにもかかわらず、三光汽船の管財人への依頼の打診がありました。ただ、すんなりと二つ返事とはいかず、相当躊躇しておりましたが、最後は社会人として育ててくれた海運界に対し、何らかの貢献とご奉公をすべきとの思いで受諾しましたが、正にブーメランのように元の場所に戻り感慨深いものがありました。

管財人就任から約一年後に更生計画を無事終了することができ、本来であれば、お役御免となるのですが、世の中

なかなかうまくいかないもので、世界景気の低迷、それに伴う運賃の暴落、円安から円高へのトレンドの変化等海運界を取り巻く環境が年を追うごとに悪化し、なかなか好転する気配がない状態のため、未だに会社に残っている状況です。

ずらずらと35年間の船会社から金融機関その後破産村、また、船員から銀行員その後管財人と異業異職について駆け足で説明してきましたが、それぞれの異なったパズルがしっかりと組み合わされたのは、ただ単に偶然なのでしょう。鹿児島から神戸、東京商船から神戸商船、会社訪問先から反田産業汽船、船員から銀行員、オーナー会社から巨大組織、債権者から債務者、金融界から破産村というように、「人間万事塞翁が馬」のような偶然の積み重ねで結果オーライではとても説明できません。

唯一説明できるとしたら、大学時代の貴重な経験がこれらの偶然に大きく作用しているのだと思います。当時国立大学では珍しく全寮制であったこと。また、4人部屋での共同生活だったため上下関係や同期との横の関係が緊密であったこと。練習船を通じて東京商船大学との交友関係が広がったこと。さらに、ボクシング部での試合の前にはストイックなまでに減量し試合に出たことが、自分自身の精神面をタフにさせたこと。

また、本学が在学生のみなならず、卒業生との絆を非常に重視していることが、卒業生にとってMother Port(母なる港)にいつでも帰ってこれるという安堵感を持たせ、さらに、本学のプライドを常に心に持ち続けることが大きな励みになっているからこそだと思います。

今後ともこの絆がより強固なものになっていくことを確信しつつ、本日の私の講演を終了させていただきます。本日はご清聴ありがとうございます。



後輩諸君への伝言 船乗りとして貫いた人生に悔いなし！



航海学科13期生 村井 五郎

1. 大学時代の思い出

昭和39年4月、深江にある神戸商船大学航海学科13期生として入学した。その時に入学をした仲間は80余名、卒業後48年になるが、その内13名が既に住む世界を異にしている。入学した丁度その年に東京オリンピックが開催され、寮の食堂にあるテレビの前で応援したことを思い出す。半世紀を過ぎて、再び東京でのオリンピックを応援出来る事になり、感無量である。

商船大学は東京と神戸にあった。どちらにしようかと迷ったが、「神戸」という地に惹かれ神戸に入学した。いまでは商船大学という名は無くなってしまったので、大変寂しく思っているのは、きっと私だけではないだろう。入学当時の商船大学は、まだ木造の校舎が残り講堂も木造であった。全寮制度が敷かれ、我々一年生は全員北寮に集められた。そして各階5号室には指導学生(3年生と4年生)が目を見守らせていた。デッキとエンジン其々2名ずつ計4名が同室で、1年間を過ごした。この1年生が北寮で生活をしたのは、12期生、13期生の2年間のみであった。全寮制は楽しかった。今はワンルームマンションのようになり自由入寮制であると聞くが、まだ貧



しかった時代であり、この制度は我々苦学生には実に助かった。食事代は90円/日(翌年は120円に値上げ)と記憶する。夜食に外で食べたどんぶりめしは味噌汁付きで60円/人、おでんを4種類食べても計100円。今からは考えられないよう

な値段だ。如何に寮食が安かったかは想像出来ると思う。中でも朝食の「うどん」は、美味しかったなど今でも懐かしい。

剣道部に入部した。以来今でも、剣道の稽古が続いている。当時の商船大学の剣道部は、なかなか強く個人戦でも団体戦でも全国大会で関西の代表校として出場をたしている。毎週日曜日以外は、約2時間体育館で稽古をした。師範は剣道界でも有名な先生で、土曜日の師範稽古は大変に楽しみであった。もう他界されているが、何度も稽古を付けて頂いて、一度だけ師範が「参った、それまで」という会心の面打ちが、出たことを今でもよく覚えている。

2. 船乗りとしての思い出

1 乗船勤務

大学を卒業して当然の如く船乗りになるべく船会社(大阪商船三井船舶)に就職した。乗船勤務と陸上勤務で約30年間在籍、その間に22隻の乗船勤務をしたが、実に楽しい仕事であった。最初に乗船した船は、日本と欧州間の定期船でOne Round約3か月を4航海し1年余り乗船した。神戸港がLast Portで一路Panama運河へ向かう。

次席3等航海士で通称4th Officer、ベテランの操舵手との当直に、初めて責任ある仕事に就いた。最初は汽笛を鳴らすことさえ躊躇した。ベテラン操舵手は、いとも簡単に汽笛を鳴らす。太平洋の真ん中で真正面から反航船が来て避航「なんでこんな太平洋の真ん中で」と思い、ドキドキしながら初めて自分のオーダーで舵をとり避航した。慣れればなんてことはないのに、今では懐かしい思い出だ。

2 海難事故

ベタ風の夕刻に雲一つない水平線に沈む太陽を見て「よく船乗りになった」と感激したことも昨日のように思ひ出す。しかし、このような感動する場面は、長い船乗り人生でも滅多に出くわさなかった。一方、その頃日本近海で Bulker(ばら積み貨物船)の船体が折損沈没するという事故が続いた。船というのは経験工学が必要であるが、その当時どんどん大型 Bulker が造られた。その手の大型船の船体が折れて沈没する事故のニュースに接し、自分の乗っている船は大丈夫かと心配した。私が乗った最初の船は、いわゆる1万トン級の在来船であった。その時の大ベテランの船長から、折れて沈没する心配はまずないと太鼓判を押されたので、以降「自分の乗っている船は絶対に沈まない」と思うようにした。

その後も船の折損事故は、私が船会社に在籍している間にも発生している。一番最近の折損事故は、3年程前の大型コンテナ船のインド洋での事故である。約300メートルもある大型コンテナ船が、インド洋のモンスーン時期に真ん中から折れて沈没した。信じられないがインターネットに投稿された事故直後の写真を見て「何故?」という疑問と、同時に船は経験工学が必要であるということに再認識した次第である。事故後その原因を調査した船会社は、「船体を軽くするために張高力鋼を使用して造った船体が外力により座屈して折損した。張高力鋼は引っ張りには強いが座屈には弱いということが露呈した」と発表し、その船を造った造船所ではもう船を造らないとしたそうである。

北太平洋やインド洋での大時化は何度も経験したが「想像を絶する」、台風の中に巻き込まれ操船がままならないこともあり、自然の力の前にはなす術もないという事実を痛感した。それでも自分の乗っている船は、絶対に沈まないと思い仕事をしたことを思い出す。



welcome point エルベ川 エルベ川よりヨーロッパ大平原

3 世界の国々

その一方で色々な国、数多くの港を立ち寄った。ほんの港の周りとは言え、他国の人と文化に触れる事が出来素晴らしい経験をした。欧州ではエルベ川やライン川を廻りハンブルグやロッテルダム港(旧)に寄港、途中の景色を見ながら、ヨーロッパの息吹を感じ、そして入港すれば暇を見ては上陸しその地の文化を楽しんだ。

地中海ではラテン系の明るい人々に接し、南米では「Hasta mañana(また明日)」といって仕事の途中でも帰ってしまう大らかさ、アフリカでは倉内の真っ暗な中で、真っ黒な人が動いていて吃驚した。アメリカではその広大な国土を見て、「こんな大きな国とよく戦争をしたものだ」と変な感心をした。ペルシャ湾では、草木一本もない大地を目の当たりにして、こんな所で一生を過ごす人も多数いるのだとやはり感心をした。「住めば都」と言うが、正にその通りと言えるであろう。Philippine 人と混乗した折若い Philippine 人航海士に、「あの草木一本も生えていない島をプレゼントしよう」と言ったら「いらない」と一蹴されてしまった。

4 陸上勤務

私の所属した船会社では、陸上勤務も経験させられた。多かれ少なかれ一度は陸上勤務を経験せねばならないが、私は4回の陸上勤務をした。海外勤務もあったが、私は一度も経験せずであった。自分の今まで乗船勤務で得た経験を生かして、出来る仕事もあれば全く畑違いの仕事をせねばならない辛い勤務もあった。しかし自分の人生の中では、貴重な体験として残っている。現在は陸上と

海上が半々位と聞いている。「陸に上がった河童」とよく言われるが、船乗りはどこでもどんな仕事でも順応出来る能力を持っていると思っている。私は神戸支店にも勤務したが、神戸の大学を出ており大好きな神戸での陸上勤務が一番楽しかった。

5 神戸港と大阪港

私は神戸港が、世界一の港と思う。間口が広く奥行きが浅い、北に六甲山があるので北風の影響は少なく、西風は和田岬で遮られ港内の流れは殆どない。しかし残念ながら神戸港は、中継港としての機能しかない。例えば、横浜港には日産自動車があり、大東京が控えている。名古屋港には、トヨタ、ホンダがある。しかし、神戸港(ダイハツはあるが規模が小さい)にはそれがない。大阪があるが今は地盤沈下が激しい。阪神淡路大地震で大ダメージを受けた神戸港は、港湾機能が麻痺して世界での地位をなくしてしまい、未だに元には戻っていない。これから昔日の神戸を期待することは無理であろう。

神戸港は、大地震で受けたダメージを回復すべく色々と策を練り実行しているが、全てが後追いになっている。例えば、船はどんどん大型化しているが、港の施設がその変化に追いついて行けない。現在超大型化したコンテナ船が神戸港(大阪港も同じ)に入港したとしても、クレーンが小さくて荷役が完全ではない。従って、船会社も神戸港(大阪港)には配船していない。この類の船舶は、日本では横浜港のみが対応可能である。客船も寄港するように誘致しているが、今は博多港に寄港する客船が多くて完全に負けている。色々提案したが何時も答えは「金がない」である。もう一つ、大阪湾(神戸港、大阪港等)は水深が浅く、深喫水の船はいくら誘致しても、水深で制限を受けて入港が不可能である。更に言えば、大阪湾でのエネルギー基地は、堺泉北港の一港に集約されている。一度事故でも発生すれば、関西一円の電気、ガスは止まってしまう恐れがある。大変に残念であるが、これが今の神戸港と大阪港の現状といえる。



ハンブルグ停泊中

ハンブルグ港

3. 水先人としての思い出

1 水先人の経験

私は船会社に約30年在籍した後、大阪湾の水先人として約18年勤務した。この間に内海へ向かう船も含めて、大阪湾水先人会での扱い船は漸減してきた。船が大型化して数が減ったこと、そして神戸・大阪の経済的な地盤沈下が、大きな要因であろう。水先人とはご存じのとおり、不慣れた船長に替って、船舶を安全に目的港に入出港させることを仕事とする。大阪湾は、特に漁船が多くその漁法も数が多い。不慣れた船長にしてみれば、水先人が乗船して操船を任せれば気分的にホットする。船長をしていた経験から、その気持ちはよく理解出来る。その船長の期待を裏切らないように、誠実に水先人をしてきた。水先人として約3,000隻を導導(きょうどう)して、何度か船長から「Good Job」と言われた。これぞ正しく「水先人冥利につきる」といえよう。反対に船長に「Pilot! Speed が速い、突っ込んで来る内航船がある、危ない」等の小言を頂戴することもあり、この時は「船長に心配をかけた」と大いに反省をしなければならない。

2 水先人制度の変化

私が水先人になる時は、条件の一つとして「3,000G/T以上の外航船の船長として3年以上の経験」が必要であったので、それにふさわしい年齢の人が水先人になっていた。ところが国の船員政策が時流にうまく合わず、日本人の船乗りがどんどん減少し、水先人のなり手が枯渇する時

代が予測された。恐れた国は、急遽水先人制度を変え、船の経験がなくとも水先人に成れる制度を新たに作った。

即ち、水先人免状に階級をつけ、3級海技士の資格を持てば乗船経験がなくとも水先人(3級)になれることになった。平成19年新水先人制度が施行され、私の所属した大阪湾水先人会にも、1期生として6人の若い水先人候補生が受験をして5人が合格した。その2年半後には、5人の3級水先人が誕生した。乗船経験のない学卒者が、水先人として実際に本船に乗り込んで来て「私は水先人です」と言っても、自分が船長ならば「お断り出来るものならば断りたい」というのが本音であるが、法律で決まっています。少し遅れて2級水先人も誕生して、現在は1級、2級、3級の水先人が混在して水先業務をこなしている。

3 水先人制度の現状

一番心配した事故については、残念ながら大阪湾にて1件発生しているが、他の水先区では発生していない。現在では若い水先人は、生き生きと水先人生活を楽しみ、戦力の一部になって



パイロット時代

いると思う。この制度が出来た当初は希望者が多数いたが、水先人とはどんな仕事かが認知されてきたのだろう。現在では、学卒後直ぐに水先人になろうとする人は減少してきたし、募集を掛けても定員が埋まることがない。水先人の仕事は、時間が不定期で色々と制限を受ける場合があるが、世間並みの休日はあり、それを上手く利用して自分の趣味を楽しむことも出来る。私も約18年水先人をしたが、趣味の剣道を続け、はたまた旅行をしたりゴルフをしたり、人によっては自分の趣味を色々と広げ、

大いに生活を Enjoy している。

大学を卒業して自分の進路を決める時、或いは転職の対象として水先人も選択肢の一つに入れても良いかも知れない。只若くして水先人を選択した場合は、単調な水先業務を何十年も続けねばならず、私としては船会社にて航海士の仕事をして、初めに述べたように外国人に接し、外国の文化も直接身を持って感じるという経験は、自分の人生にとって大きなプラスになると思う。

現在船会社に就職しても、実際に乗船出来る船種と航路は限られており、私が経験したようなことを望んでも無理かも知れないが、他にも楽しみ方はいくらかもあると思う。色々な船種の大きさの異なる船に乗り、操船を覚え操船以外の Management も勉強して人間の幅を広げて、水先人に転出した方が Better かも知れない。



スエズ運河

4. おわりに

商船大学を卒業して船会社に入社、乗船勤務と陸上勤務を経て約30年在籍した。その後約18年の水先人を経験し、今秋(H28年9月)に仕事人間を卒業して暇人となった。振り返ってみると、いろいろな経験をした幸運な人生であったと思う。これから大学を卒業して社会人になろうとする若い人達が、自分の職業を決めようとするときに、私の辿った道が少しでも参考になればという思いから投稿した次第である。無限の可能性を秘めた若い君たちの将来が、バラ色であることを心から祈って筆をおきたい。

以上

編集後記：

同じ13期の村井五郎氏は剣道部で活躍し、学生時代から剣豪宮本武蔵を連想する風貌・体格で、70歳を越えたいまでも若々しさを保ち、まさに「侍CAPTAIN & PILOT」の半生記を一気に読ませていただきました。歴史的にも変革期に大きく関わった長岡京市の地で育ち、現在も在住し小中学生等に長く地域ボランティアで剣道を教えたり、最近は京都市内の有名な観光寺社名所の案内ボランティアにも応募され元気に活動されています。現役時代から諸先輩が退職後は健康維持に率先してボランティア活動の参加を勧めておられていましたが、村井五郎氏がその教えを実践され、高齢者に必要な家庭以外での楽しい居場所を数か所持たれていることです。今後も永くご健勝でご活躍を祈っています。

海神会 事務局長 神吉 行彦



パイロットラダーにて下船中



岸和田港通船乗場



ロッテルダム出港



陸上に上がった海の男の半世紀



神戸 E21018 神杉 恵助

3ヶ月必死に遅れを取り戻すための毎日だったと記憶しています。しばらくして、ヘルメットを被り現場周辺を歩いていると大手船会社へ入社した同期の友人が通りがかり、声をかけられ一

航海終えての神戸上陸だったのか充実感あふれんばかりの顔がそこにあったのが思い出されます。そうこうして、1年もたたない頃小さい現場だけど、一人ですべて担当するようにと上司に言われ太陽神戸銀行高砂支店新築工事の空調設備工事をゼネコンの下で実施していくことになったのです。ゼネコンの建築主任、今でもはっきりと覚えています。新人で素人の私にいろいろ指導して頂き、感謝するだけです。当時の施工図は今でも大切に宝物として保管しております。1億円程度の仕事でしたが協力会社の人にも助けられ、何とか竣工させることができたのです。小さいけれどこの達成感は満足のいくものでした。入社3年目は姫路市庁舎新築工事の現場へ着任、半年ほどして、三木大規模年金保養センターの施工図応援ということで兵庫県中心に約4年が過ぎ去りました。

そして、厳しい現場ということで営業所は受注しないという判断をしていた難物件を当時の支店技術部長（E3期・蔭山先輩）が大阪支店としてやるので、君が対応しなさいと指名されたのです。神戸ポートピア博覧会を控えてのシティホテル建設・神戸ポートピアホテルの新築工事現場への着任でした。実はこの現場こそ私の仕事の進め方を確立できた最後の現場だったのです。この時も大手ゼネコンの設備担当〇〇課長に大変お世話になり、施工計画の大切さを教えて頂き、客室554室の高層階をプレファブ工法で仕上げるのができ、大きな実績と自信になったのだと思います。当時、品質管理(TQC)という手法が建設業界にも取り入れられ、当現場もこれに則り進められ最終選考では、ゼネコン本社での発表会が設けられ金賞を頂いたのも嬉しかったものです。そして、当時の技術部設計課長が現場視察に来られ、この計画書は君が作ったのかと聞かれ、説明すると、一週間後その現場を終えたら、大阪支店の設計課に異動すると言われたのです。設計に來てみると、1980年代日本が第2高度成長期に入ってきており、電子・デバイス半導体などの工場計画が目白押しだったのです。

5. 高砂熱学工業での30代

当時、先端技術の粋と言われたクリーンルームの設計に携わることもとなり、米国の書籍・NASAの連邦規格など当社も先駆けて対応していたこともあり、多くの学ぶ材料がありました。物件も多岐にわたり、テープ工場・医薬製薬工場・食品工場など産業系の空調・電気・用役工事・インフラ工事を設計していく仕事为主になっていたのです。最も転換期となったのが、半導体メーカーへの出向業務でした。当時クリーンルームは、空気きれいな山間部に建設するのが常識とされていたのを、諸般の事情で海辺に建設する計画となっていたのです。海辺では、海塩粒子の影響で製品に不良品が出やすと考えられていました。今でいうケミカル汚染対策の走りです。電子立国ニッポンというNHKで放送されたのもこのころです。畳2畳分の設計回路を1cm角のチップに製版していくため、0.1μmの粒子を1CF当たり100～10個以下にしてある環境づくりを求められたのです。現在では、256MB⇒64GBなどと更にグレードの高い仕様となっていますが、全体でなく必要な部分のみの高度清浄下というように空調システムが変遷してきております。

この出向先での約5年間は、他社の企業文化・異業種の方々との出会い・コミュニケーションをとれたことで、物の



1. はじめに

元来、文章を書くのが苦手なタイプなのですが、先輩の理事の方から筆を執ってくれと言われ恥ずかしくもなく引き受けた次第です。半世紀50年と一言で申しますと、永いやら短いやらそれでも何とか64歳になっても、元気に現職をさせてもらっていること自体、大変有り難いことと考えています。人の役割として、今思うことは、生命を繋ぐことそして魂を繋いでいくことという、私の人生訓からすれば下手な文章でも二つ目の役割として、これからの若い人への一助になれば幸いかなと思う次第です。

2. 20歳での転機

昭和27年3月6日、長崎のとある田舎町で生をあずかり、小学校・中学校・高等学校と港と海に恵まれた長崎市内の小さな街で過ごし、朝から晩まで野球ばかりの毎日でした。埋め立て地で夜遅くボールが見えなくなるまで野球をやっている、と、岸壁に停泊中の船員さんが近づいてきて、お腹空いてきたらご飯でも食っていけと言われ、船内で食事をご馳走になり非常に美味しかったのを今でも鮮明に覚えております。確か、大盛の天井だったと思います。実は、大学を受験するのに将来何をしていけばいいのか判らずにいたとき、船に乗ろうと決めたのがこういう背景が影響したのかもしれないと思う次第です。私大理工学部を1年で辞め、20歳のとき商船大に入学したのが、これからの人生を決めていったのだと思います。

3. 大学時代と就職先の決定

小学・中学・高校とスポーツを経験したこともあり、全寮制には何の抵抗もなく入学後北寮308号室で4年間過ごすこととなりました。入寮歓迎会での自己紹介には、少々驚きもありましたが、つつがなく終えたようにも思いました。ただ、お酒の飲み方が予想以上であったのは言うまでもありませんし、記憶に新しいことです。お陰様で、自分の限界を知ることができ、その後大変参考になっていると思います。あれほどの理不尽なことは、社会ではないだろうと思えたことが、一つの会社で40年も楽しくやってこられたのだと、今では感謝する次第です。乗船実習、4年半の学生生活も無事終えることができ、やっと稼ぐため社会にでられる・船会社に入って外国航路に乗りたいと思い就職担当教授に〇〇会社に就職したいと申し出ると、当時オイルショックの影響で大手6社から1名ずつの求人枠しかないという話でした。それでも、受けさせて欲しいと申し出るも同じくらいの成績で縁故などもあり、君は無理だろうと言われたのです。兎に角、いろんな事情で私はすぐにでも就職したいと申し出るという会社がある。メインエンジンがないだけで、冷凍機もポンプもファンもあるし優秀な先輩もいるので役に立つはずだ。船が止まっていると思えば同じだ。{高砂熱学工業}という会社を受験したらいいと言われたのです。これが私の陸上に上がったきっかけでした。

4. 高砂熱学工業での20代

右も左もわからぬまま、建設業の世界に入り、することといえば建築物の中を構成している機械設備工事を仕上げていくという仕事でありました。建築用語もわからぬまま、見よう見まねで仕事していくしかありませんでした。他の大学出身者は、4月1日付け入社でオリエンテーションで基本的業務の進め方などを1ヶ月本社でたたきこまれ、約半年現場に入り、私が入社する10月1日には一人前のような顔をして、第2ステップの研修を1ヶ月受講するスケジュールであったのです。その中に10月1日付け入社私も参加することになったのです。施工図作成、機器選定、工程表作成、見積書作成など私にとっては、出鱈目な実習になったことは言うまでもありません。これは大変なことであることを実感させられ、社内教育資料の設計基準・施工規格などを読みあさったものでした。書籍「百万人の空気調和」は大変助かった記憶があります。1ヶ月の研修を終え、配属になったのが大阪支店神戸営業所でありました。所長に挨拶するとすぐその足で最初の現場（兵庫県農業会館）へ着任することとなったのです。知らない町でもないし、2～

見方が変わる・全体を俯瞰できるという貴重な体験をさせてもらったのです。世界を感じたのがこの頃です。スイスのチューリッヒでの世界空気清浄大会、カナダのミッドランドでのクリーンルーム建設で1ヶ月、台湾でのクリーンルーム工場建設など技術という共通言語で世界と交流できたことを誇りに思った次第です。

ドイツ人の几帳面さ、イタリア人のおおらかさ、フランス人のグローバル的な考え方、ナイアガラの水が湖の段差だったことなど、“百聞は一見に如かず”を感じたものです。



6. 管理職？

(常に、現場に近いプレーヤーでありたい自分とのギャップ)

出向先から社に戻ると、設計課長・設計部長とプレイングマネージャーとしての仕事が10年ほど続いたのです。この間には、学会・協会・工業会などの仕事にも携わらせて頂き、その後の産学連携を進めていく中で大変参考になったとも言えます。また、このころはものづくりのプロセス管理として合理的なシステム・ISO品質管理による品質保証体系が、建設業界でも積極的に導入されていく時代でした。

御他聞にもれず、当社も取り組むこととなり、1997年ISO9001、1999年ISO14001と品質・環境マネジメントシステムの認証・取得をしていくこととなりました。これは、従来の仕事の棚卸しをすることで仕事の進め方を変えていくきっかけとなり、経営上も有効な手法であったと思います。また、立場上この時感じたのが高砂熱学工業の顔として、セールスエンジニア的仕事の進め方に注力していたように思います。顧客最優先・現場第一主義と言いながら充分できていない現状でしたので、自ら顧客ニーズを的確に捉え、それに応えるべく会社全体として対応し、社会に貢献していくことを目指しました。事が思うように進まない時は、因果応報であり全て自分の努力不足として受け止めることで、いろいろなことを解決できたものです。設計部長を6年間勤めさせて頂き、50歳代は海見える所に移り住み、のんびり余生を過そうとなどと考えていた。その矢先、東京への転勤を命じられたのであります。51歳の誕生日を迎えた年でした。

7. 高砂熱学工業・東京生活での50歳代

本店設計部長2年、産業空調事業本部4年(営業部長・副本部長執行役員)、関信越支店長3年(取締役支店長)、技術本部長2年(常務取締役本部長)現在エンジニアリング事業本部長2年(専務取締役本部長)を歴任しています。あっという間の13年間の東京生活でありました。この間に学ばねばならなかったことは、経営・経済という分野が主

でありました。

スピード感ある事業環境のなかで、東日本大震災の影響は大きなものでした。なにげなく利用しているエネルギーの見直し・使い方、事業継続の重要性、自然の凄さ、想定外の意味など考えさせられることが多くあったことは事実であります。

余談であります。平成22年4月～平成25年3月までの3年間、関信越支店長時代産業系の顧客が多いということもあって、私とその地区も担当しました。新潟・群馬・栃木・長野・山梨・埼玉・茨城の7県、社員100名・売上高120億の規模でした。3年目には、社員200人・売上高250億の規模に拡大し、みんなのベクトルを一つにして一枚岩になることがどれだけ大切かを学んだ3年間だったように思います。これらも、学生時代に寮生活・乗船実習で船乗り生活の基本を経験、良き先輩・同僚から学んでいたお陰だと思えます。そして高砂熱学工業というエクセレントカンパニーに身を置くという、恵まれた環境にあったことが原因であり、大変幸運な50年だったと感じる次第です。

この半世紀を振り返って思うことは、私のサラリーマン人生で大切なこととしてきた”媚びない・偉ぶらない・逃げない”人材を見つけ、育てていくことが、最重要課題と位置づけ、後輩へつなぐための行動に重きを置き、日々を過ごしていきたいと考えます。両親と生活して約20年、妻と2人の息子・家族と生活して約20年、そして学生時代10年・東京生活10年の単身生活約20年となるわけですが、船乗り生活を経験、仕込まれたお陰で料理・洗濯・アイロンかけ・裁縫とか、なんとかこなしてこられたのだと考えている次第です。流石に60歳を超えては厳しいものがあるため、現在は月半分程家内が上京し世話をしてくれている状況です。

8. 最後に

私自身、非常に多くの方々に支えられ、少しずつではありますが人間として成長できたのかもしれない。商船大学・高砂熱学工業という道場を与えてもらったことに感謝したいと思えます。文面で表せなかったことは、家族・特に二人の息子たちに話伝えていきたいものです。そういう意味で、今回の半世紀を綴れる機会を与えて下さった先輩に紙面ではありますが御礼申し上げます。ありがとうございます。今後の海神会の益々のご発展・ご隆盛を祈念して、筆を置くことと致します。

以上



最近の海事博物館

海事博物館では毎年7月の「海の日」から10月末の神戸大学「ホームカミングデー」までの3ヶ月間、様々なテーマで企画展を開催しています。先の「海神会たより」でお知らせしましたように、2017年は神戸大学の深江キャンパスが創基100周年を迎えますことから、これを記念して「神戸における海技者教育100年のあゆみ」と題した企画展を2年にわたり開催しています。2016年の前編では私立川崎商船学校の開校から神戸高等商船学校、さらには神戸商船大学までの変遷を取り上げました。2017年の後編では神戸商船大学における教育の変革や大学統合とともに、これからの将来展望をも視野に入れた企画展示を検討中です。近年、本学の人文学研究科から教員2名が海事博物館専門員に加わりました。館長を含むスタッフ全員がボランティアながらも、さらなる企画運営を目指しています。ご期待ください。

ところで、これまで本紙を通じてお願いしていますが、海事博物館では卒業生の特別専門員を随時募集しています。

海事博物館 特別専門員 航海科7期生 柴田 康彦

このボランティア活動を私たちと一緒にやってみようと思われる方がおられましたら是非ご一報ください。また、お手許、あるいは周囲に海事関連書籍や海事資料の寄贈をご検討中の方がおられましたらこちらまでご連絡ください。お待ちしております。

海事博物館事務局：078-431-3564

(月、水、金 午後のみ開館)





オフショアセーリング部

グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース3年 主将：田口 朋

- 活動に使用するヨットの整備費、大会出場費
- 96人(4回22人、3回18人、2回28人、1回28人)
- 24フィートの船6艇、26フィートの船3艇で週3～4回練習しております。月に一度レースに参加したり、大阪湾でクルージングを行なっています。冬には船を陸に上げて整備を行なっております。昨年は全日本学生外洋帆走選手権で2連覇を果たし、11月に行われた世界選手権にも出場しました。
- 艇が増え、人も増え、活動の幅を広げられるようになってきました。今年も全日本学生外洋帆走選手権での3連覇、マッチレース上位入賞を目指し、練習に励んでいきます。クルージングやレースを通して、部全体でセーリング技術の向上を目指して頑張っていきます。
- 毎年ご支援頂き部員一同誠に感謝しております。ご支援ありましての部活動です。これからも日々成長できるように、練習に励んで参ります。よろしく願い致します。



カヌー部

海洋安全システム科学科3年 主務：喜多村 匡郎
発達科学部3年 主将：多田 羅 光樹

- 大会遠征費
- 部員15名(3回生5人、2回生5人、1回生5人)の内10名は海事科学部の学生です。
- 我々は、毎年8月に行われる学生の関西大会ならびに全国大会に向け、ほぼ毎日活動しております。2016年8月に行われた関西大会では4人乗りで3位、新人部門で優勝、また全国大会においては、新人の部で1回生全員が表彰台に上がり、総合で3位という成績を収めました。そして、9月にドイツ行われた世界カヌーマラソン選手権大会に主将が日本代表として出場するなど、着実に実績を残してきています。
- 今後は、夏の大会で部員ひとりひとりがさらに良い結果を残すことを目標として日々の練習に取り組んでいきます。また、来年度はさらに部員数を増やし、大会での成績はもちろんのこと、チーム自体も盛り上げて行き、勢いのある部活動にしていきたいと思っています。
- ご支援いただき誠にありがとうございます。これからもより一層練習に打ち込み、良い成績を残せるよう努力してまいります。今後とも宜しくお願い致します。



フォークソング部

マリンエンジニアリング学科メカトロニクスコース3年 金森 郁奈

- 楽器などの機材・備品の購入費、ライブ運営費の補助
- 8人(3回生4人、2回生3人、1回生1人)
- 私たちは、それぞれの演奏技術を高めるため、また音楽を楽しむために、日々練習を重ねております。各自でグループを組み、年に数回部室にてライブを開催しています。他学科や他大学の音楽サークルとの交流も続けており、それらの団体と共同でライブハウスを借りてのライブも行っています。
- 来年度以降の活動を安定させていくために、まずは部員を増やすこ

とが必要不可欠だと考えます。そのために、ビラの配布などの宣伝を行い、海事科学部で音楽をできる場所があると周知していきたいと思っています。

- 毎年のご支援、誠にありがとうございます。皆さまのご支援のおかげで、老朽化した機材の買い替えや、部室の備品の購入などを行うことができ、演奏の質の向上に繋がっております。頂いたご支援が無駄にならないよう、今後ともしっかりと活動していきたいと思っています。今後

とも、ご支援のほどよろしくお願い致します。



他大学とのライブの写真



男子端艇部

グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース3年 主将：時田 拳也

1. 大会遠征費
2. 16名
3. 11月に行われる西日本新人カッター競技大会、6月に行われる全日本カッター競技大会に向けて日々練習に励んでおります。夏には巡航を行い、10日間かけて瀬戸内海を航海しました。
4. 全日本カッター競技大会優勝
5. 皆様方からご支援をいただき、この度の第62回新人カッター競技大会では、見事優勝を成し遂げることが出来ました。誠にありがとうございます。来る全日本カッター競技大会におきましても、皆様方によりご連絡ができますよう精進してまいりますので、今後とも何卒かわらぬご支援、ご愛顧のほど、よろしくお願い申し上げます。



女子端艇部

マリンエンジニアリング学科 メカトロニクスコース3年 主将：三村 梓紗

1. 支援金は大会参加費、遠征費の補助として使用させていただきます。
2. 6名
3. 2016年5月8日 神戸港カッターレース 優勝
2016年6月4日 全日本カッター競技大会 準優勝
2016年10月22日 西日本新人カッター競技大会 6位
4. 部員が少なくなったため、人数を増やし全日本大会で優勝を目指したい。
5. 毎年、ご支援いただきありがとうございます。海神会の皆様のご支援に応えられるような結果を目指し、日々の活動に取り組んでいきたいと思っております。今後ともご支援よろしくお願い致します。



茶華道部

グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース4年 辻本 佐和子

1. お稽古代、お茶会費用、備品補充等
2. 3名
3. お稽古(不定期)、1月に和室にて新年会(お茶会)を開催いたします。
4. 1月のお茶会を成功させることです。
5. 活動へのご理解、ご支援をありがとうございます。部員数が少ないながらも、お稽古に励んでおります。忙しい時間の中でもほっと一息つきながら、お茶を楽しみ、一期一会の機会に感謝しております。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。



2017年1月 茶室にて初釜

弓道部

マリンエンジニアリング学科 メカトロニクスコース3年 主将：南 研成

1. 的紙などの共同備品、除草用雑費などの道場整備品購入費
2. 4名
- 3・4 主に個人での活動が多いですが、自分と向き合い、精神力を高めるために各々稽古に励んでいます。今後はそれぞれ昇級昇段審査にて級、段の所得に臨みたいと思っております。
5. ご支援感謝しております。これからも精進を重ね、日々の充実と自身の研鑽を目指します。





第11回神戸大学ホームカミングデイ

神戸大学大学院海事科学研究科

広報・社会交流推進委員会 平山 勝敏、三島 智和

2016年10月29日(土)、第11回神戸大学ホームカミングデイが開催されました。当日の午前中には、六甲台キャンパスの出光佐三記念六甲台講堂にて、神戸商船大学を昭和56年に卒業され、現在、三光汽船株式会社代表取締役社長の田端仁一氏(神戸商船大学航海学科第26期生)による記念講演「異業異職」が行われました。その後、当日午後2時半より、深江キャンパスにて学部企画が実施されました。卒業生、教職員を合わせ87名の方にご参加いただきました。準備にご協力をいただいた海神会、教職員、学生自治会の皆様、並びにご参加いただきました皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。以下、各講演について簡単に報告させていただきます。

1. 記念式典：記念講演

出光佐三記念六甲台講堂において行われた記念式典で、昭和56年に神戸商船大学商船学部を卒業された田端仁一氏により「異業異職」というタイトルで記念講演が行われました。

田端氏は神戸商船大学卒業後、航海士として船会社に就職されてから35年間で畑違いの様々な業種、職種を体験された中で「何故仕事を辞め、何故転職したか」をキーワードに、ご自身が前職での経験を如何に活かしてキャリアを積み上げていかれたかというお話と、大学時代の貴重な経験が励みになったからこそ未経験の仕事に成し遂げることができたということを熱心に語られました。仕事に対する情熱が伝わってくる大変興味深い内容であり、神戸大学の卒業生からは、深く感銘を受けたとの感想が寄せられました。



田端仁一氏による記念講演

2. 学部企画：学部長挨拶・大学現況報告

同窓会企画である海神会評議会終了後に学部企画がスタートしました。まず、内田誠学部長より、当日午前中に開催された記念講演の講演者である田端仁一氏のご紹介がありました。田端氏と内田学部長は、同じ26期生ということで同級生だそうです。

その後、大学の現況報告として神戸大学および海事科学部・海事科学研究科を取り巻く昨今の状況が報告されました。具体的には、昨年度以降の教員の退職および着任、執行部の新体制、国際海事機関(IMO)の前事務局長である関水康司先生の特別教授就任、国立大学法人第3期中期目標期間(6ヶ年)の開始、クォーター制の導入と教養教育充実、科学技術イノベーション研究科設置、海事博物館企画展の開幕、教員組織と教育組織の分離、教員ポイント制導入、深江丸探査航海、公開講座・市民セミナー、大学院(前期課程)第II期入学試験、海事科学研究科における定員の改訂およびコース再編等が、この1年における主な学内の動きとして紹介されました。



内田誠学部長による大学現況報告

3. 学部企画：学生による研究発表

続いて海事科学研究科修士2年生の森田栄太郎君による研究発表が行われました。題目は「高周波共振形電力変換技術を応用した非接触電力伝送システム」で、研究指導教員はマリンエンジニアリング講座電気工学研究室(パワー

エレクトロニクス分野)の三島智和准教授です。

本研究では、船舶・自動車・鉄道などの輸送機器や、工場内無人搬送車両などの蓄電池(バッテリー)を搭載した移動体機器へ無接点(非接触：コンタクトレス)にて高効率に給電することができる電力変換回路とその制御システムの新開発を目的としています。特徴として、新世代超低損失パワー半導体素子である窒化ガリウム(GaN)パワートランジスタを適用し、数センチ間の空隙ながら95%に近い高効率な電力変換動作が実験室レベルの試作装置にて達成されたことが報告されました。発表修了後には、会場から専門的な質問が3件あり、活発な議論が交わされました。



森田栄太郎君による研究発表

4. 学部企画：記念講演

最後に、海事科学研究科教授で海洋底探査センター観測システム部門長を兼任する河口信義教授による記念講演「海洋底探査センターと海洋計測」が行われました。司会を務められた佐俣博章教授による略歴紹介の後、「海洋底探査センターと海洋計測」という題目で約50分間ご講演をいただきました。

まず、「海洋底探査センターとは」をテーマに、全学共同研究教育組織として設置された海洋底探査センターの学内における位置づけ、薩摩半島から約50km南にある鬼界海底カルデラが当面のターゲットであること、同センターの5つの部門(探査運用部門、構造探査部門、観測システム部門、火山学部門、金属鉱床評価部門)のそれぞれの役割とメンバー構成、国内外研究機関との連携体制等が紹介されました。

次に、「カルデラ噴火とは」および「鬼界カルデラとは」をテーマとして、カルデラ噴火の規模や起こる確率、約260万年前以降に国内で起こったカルデラ噴火の場所、理学系研究者によれば「つい最近」にあたる7300年前に鬼界カルデラ噴火が起こったこと等が紹介されました。

さらに、「今後の海洋計測」というテーマで、マルチチャンネル反射法地震探査法を海洋計測へ応用することで「地震音響海洋学」という新しい分野を開拓発展させるという今後の研究計画を披露いただきました。また、理学系の人達と話す機会が増えて思うこととして、海事科学部および海事科学研究科における今後の教育の在り方について有意義なご示唆をいただきました。



河口信義教授による記念講演

なお、学部企画に先立ち13:30から14:30まで同窓会企画である海神会評議会が行われました。また、併催企画として12:30から16:30まで海事博物館および附属図書館海事科学分館の見学が行われ多数の方にご来場いただきました。

講演終了後には、梅木ホールに場所を移して懇親会が開催され、多くの方にご参加いただき大変盛況な会となりました。懇親会の最後には、寮歌を皆で歌いホームカミングデイに相応しい場となりました。来年もホームカミングデイへのご参加を心よりお待ちしております。

会計報告



平成28年度 第13回総会式次第

開催日時：平成28年5月28日(土) 15:00～16:30

開催場所：学内総合学術棟 1F 梅木Yホール

- 1.開 会
- 2.会長挨拶
- 3.議長選任
- 4.議長署名人の選出
- 5.議 案

第1号議案：平成27年度事業報告、収支決算及び監査報告について

第2号議案：平成28年度事業計画及び収支予算案について

第3号議案：平成28年度事業計画及び収支予算案について

第4号議案：会則の改正について

第5号議案：ワーキング・グループ(WG)の経過報告と提言・提案書の提出について

6.内田 誠海事科学研究科長より
海事科学研究科及び海事科学部の現状についての近況報告がなされた

7.各支部の活動報告

8.閉会

平成27年度 海神会 収支決算書

(単位:円 平成27年4月1日から平成28年3月31日迄)

科 目	27年度予算額	27年度決算額	差 異	備 考
I.収入の部				△は実収入が予算額より多い事を示す
1.会費収入	5,500,000	6,172,000		
2.雑収入	500	365		
当期収入合計(A)	5,500,500	6,172,365	△ 671,865	

II.支出の部				
1.事業費				
総会経費、会誌発行、送料等	1,090,000	1,166,749	△ 76,749	
HP維持、クラス会、学級支援	1,500,000	953,800	546,200	10,20 期生
関係団体、支部、部活経費等	1,208,000	1,211,951	△ 3,951	
小計(a)	3,798,000	3,332,500	465,500	

2.管理費				
人件費、会議、交通費等	1,515,000	1,573,000	△ 58,000	
印刷、通信、消耗品	13,000	6,012	6,988	
事務費、光熱費、雑費等	174,500	156,243	18,257	
小計(b)	1,702,500	1,735,255	△ 32,755	

III.予備費(c)	0	0	0	
------------	---	---	---	--

当期支出合計(B=a+b+c)	5,500,500	5,067,755	432,745	
-----------------	-----------	-----------	---------	--

当期収支差額(C=A-B)	0	1,104,610		
---------------	---	-----------	--	--

当期余剰金処分案	平成27年度
平成27年度前期繰越金	3,970,950
当期繰越金	△ 2,198,594
次期繰越金	1,772,356

※収支決算書並びに予算書に於いて疑問点がありましたら事務局までお問い合わせください。

平成27年度 海神会 特別会計 収支決算書

(単位:円 平成27年4月1日から平成28年3月31日迄)

科 目	27年度予算額	27年度決算額	差 異	備 考
1.収入の部				
預金利息	9,500	9,559	59	定期、普通預金利子
収入合計(A)	9,500	9,559	59	

2.支出の部				
送金手数料	0	0	0	
合計(B)	0	0	0	

次期繰越収支差額(C=A-B)	9,500	9,559		
-----------------	-------	-------	--	--

当期余剰金処分案	平成27年度
平成26年度繰越金	28,817,889
平成27年度繰越金	9,559
次期繰越金合計	28,827,448

特別会計は、神戸大学海事科学部同窓会「海神会」の基金として置くものである。

平成28年度 海神会 収支予算書

(単位:円 平成28年4月1日から平成29年3月31日迄)

科 目	28年度予算額	27年度決算額	差 異	備 考
I.収入の部				
1.会費収入	6,280,000	6,172,000		
2.雑収入	500	365		
当期収入合計(A)	6,280,500	6,172,365	108,135	

II.支出の部				
1.事業費				
総会経費、会誌発行、送料等	1,170,000	1,166,749	3,251	
HP維持、クラス会、学級支援	1,530,000	962,430	567,570	10,20 期生
関係団体、支部、部活経費等	1,265,000	1,203,321	61,679	
小計(a)	3,965,000	3,332,500	632,500	

2.管理費				
人件費、会議、交通費等	1,828,500	1,573,000	255,500	総合運営委員会等
印刷、通信、消耗品	10,660	6,012	4,648	
事務費、光熱費、雑費等	168,000	156,243	11,757	
小計(b)	2,007,160	1,735,255	271,905	

III.予備費(c)	0	0	0	必要な場合特別会計より
------------	---	---	---	-------------

当期支出予算額(B=a+b+c)	5,972,160	5,067,755	904,405	
------------------	-----------	-----------	---------	--

次期繰越収支差額(C=A-B)	0	1,104,610	△ 796,270	前期末払金含
-----------------	---	-----------	-----------	--------

平成28年度 海神会 特別会計 収支予算書

(単位:円 平成28年4月1日から平成29年3月31日迄)

科 目	28年度予算額	27年度決算額	差 異	備 考
1.収入の部				
預金利息	9,500	9,559	59	定期、普通預金利子
小 計	9,500	9,559		
前年度繰越収支差額	28,827,448	28,817,889		
合計(A)	28,836,948	28,827,448	9,500	

2.支出の部				
送金手数料他	10,000	0	10,000	
予備費	500,000	0	500,000	
合計(B)	510,000	0	510,000	

次期繰越収支差額(A-B)	28,326,948	28,827,448	△ 500,500	
---------------	------------	------------	-----------	--

特別会計は、神戸大学海事科学部同窓会「海神会」の基金として置くものである。

クラス会



神戸商船大学航海科 11 期生卒業 50 周年記念同窓会

航海科 11 期生 斎藤 幸一

昭和 41 年卒航海科 11 期生の我々は去る 11 月 13 日に有馬温泉のザ・グラン・リゾート・プリンセス有馬にて卒業 50 周年記念の同窓会を開催致しました。

同窓会に先立ち 8 名の者が深江キャンパス及び白鷗寮を見学させて戴いた後白鷗寮の近くに建立された柔道部の共同墓に眠る大学時代の最後の試合で首の骨を折り首から下が麻痺した状態で病闘生活に耐え平成 24 年 8 月 30 日に逝去した木村頼二君に供花した後ホテルに向かいました。



参加者は 5 組のご夫婦を含む総勢 32 名、奥様方にはむつき男性ばかりの会に花を添えて戴きました。

17 時 45 分に集合写真を撮った後 18 時から宴会開始。料理は秋を主題にした会席膳、美味な料理につられ、つつい

お酒も進み、歓談に大いに盛り上がりしました。

20 時過ぎに宴会終了後二次会用に抑えて置いたロイヤル・スイート・ルームで持ち込みの酒類で時間制限無しの二次会開催。翌日ゴルフを予定している者はそこそこの時間に部屋に退散、最後まで粘っていた者も 1 時には完全にダウン。

翌 14 日はゴルフ組 5 組は 7 時ホテル出発、ホテルの朝食が 7 時半以前には供食出来ないと言うのでホテルの近くのコンビニで調達したお握りとお茶を持って出発。非ゴルフ組の者はホテル主催の鼓ヶ滝公園への早朝散歩に参加する者、朝風呂を楽しむ者、ぎりぎり迄布団から離れない者とさまざま。

8 時からの朝食は和・洋・中のビュッフェ・スタイル、気の合った者同士がテーブルを囲んでゆっくりと朝食を楽しみました。10 時にチェックアウトをして流れ解散。

電車で新神戸駅に向かう者、高速バスで新大阪駅に出る者、自家用車で帰途につく者、有馬ロープウェイ・六甲ケーブルを経由して三ノ宮に出る者等々。この内有馬ロープウェイを利用した者は眼下に広がる今を盛りの紅葉に感激しました。

最後になりましたが海神会からの多大のご支援に厚く感謝申し上げます。



神戸商船大学機関学科 11 期卒業 50 周年記念同期会

機関学科 11 期生 多田 勝

時代に翻弄されながら懸命に生きてきて、ふと後を見ると 50 年の歳月が積み重なっていました。

11 月 11 日に記念の同期会を計画したところ、25 名の出席を得て、かんぽの宿有馬で楽しく語り合う機会を持ちました。仕事や体調不良、家庭の事情で数名急に取りやめになりましたが大変残念がっていました。



まずホテルに行く前に神戸商船大学がどのように変わっているかを感じるために、15 名の希望者で、施設の見学をおねがいしました。船舶運航シミュレータではデッキ・エンジン連携の最近の技術を取

り入れた装置に感心し、また深江丸の矢野船長からは船内を懇切丁寧に案内して戴き、建造 40 年の船体とは思えない行き届いた管理に胸を打たれました。

最後に海事科学博物館を見て、海運の昨今のおさらいをしました。

その後ホテルのバスでかんぽの宿有馬に移り入浴後、懇親会を開きました。一旦、会が始まると 50 年の歳月をアツという間に飛び越え、懐かしい寮生活、会社時代の愚痴、現在の生活や病気の対処方法などに花が咲き 3 時間が夢のように過ぎました。とくに海事科学博物館からいただいた入学時の初々しい集合写真には、みんななつかしい思いを呼び覚まされていました。3 年後の再会を期して体を維持しようとの掛け声でお開きとしました。

この同期会に海神会より多額の祝儀をいただき経費の一部とさせてもらいました。ありがとうございました。深江丸およびホテルでの集合写真を添えて報告とします。



航海学科 21 期 機関学科 21 期 原子動力学科 1 期

航海学科・機関学科 21 期、原子動力学科 1 期は下記内容で 40 周年記念同期会を開催したので報告いたします。私達は 30 周年記念同期会を開催以来、金刀比羅神社参拝ツアーや飲み会・ゴルフコンペの内容で、毎年同期会を実施し、35 周年には神戸・東京合同同期会(1泊2日の懇親会・ゴルフ)を箱根で行ってきました。今回の 40 周年は例年の参加者に加え、初参加者もあり、卒業以来 40 年ぶりになつかしい再会を果たすこともできました。

開催日：2016 年 5 月 15 日(日)～16 日(月)

内容：15 日 18 時 00 分～懇親会於いて「基」(深江)

16 日 8 時 00 分～ゴルフ会於いてライオンズ C C

出席者：懇親会 42 名(航海学科 24 名、機関学科 9 名、原子動力学科 9 名)、ゴルフ会 17 名

懇親会会場は永らく「辰よし」(白鷗橋東側)にお世話になっていましたが、閉店したため、同じ場所に開店した「基」の 2 階を貸し切りです。遠方からは宮崎からの参加があり、40 年の月日を経ての再会でしたが、わいわいとにぎやかに話が弾みました。初参加者を中心にスピーチしてもらいましたが、私達の卒業年度は就職難であったため、卒業後の進路は海運業界以外に多く求めざるを得ず、スピーチでは様々な職歴の話も披露されました。参加者の肝臓は、店からは「よく飲みましたね。」といわれるほど、よく働き、酒

航海学科幹事 N21 期 久富 央治、山本 啓郎

機関学科幹事 E21 期 引間 俊雄

原子動力学科幹事 A1 期 福田 勝哉

豪ぶりは健在でした。

翌日のゴルフ会は、日頃の腕前に少し及ばず 80 台のスコアになった者、リベンジを誓い来年も同じコースでの開催を希望した者、飛距離が落ち年のせいと嘆く者など様々でしたが、参加者全員元気にプレーしました。

海神会から頂戴した支援金の使途につき報告いたします。懇親会では 4 月の熊本地震で熊本市内の自宅に大きな被害を受けた同期の航海学科木之田さんへの義援金を募り、これに、海神会からの支援金の一部を合わせて援助しました。残りの支援金は、懇親会の費用に充当させていただきましたので厚くお礼申し上げます。

なお、今年 11 月には 40 周年記念の神戸・東京合同同期会(11 月 11 日(金)ゴルフ会、12 日(土)パーティ)を東京で開催することになっています。





第34回白鷗杯ゴルフ大会

2016年11月9日 垂水ゴルフ倶楽部

第34回白鷗杯ゴルフ大会が、平成28年11月9日(水)、垂水ゴルフ倶楽部(神戸市垂水区、パー70)で開催されました。

当日は、関東では木枯らし1号が吹く、朝から寒い風の日でした。気温11.7℃、湿度55%というゴルフ日和の中、アウト6組、イン5組の35名が、ダブルペリア方式による18ホールストロークプレーで熱戦を繰り広げました。

今年は11月にはいつからの大会ということで昨年に比べ参加者が少し減りましたが、2期生から田中淳夫さん、片岡英二さん、越智一夫さんら3名が参加されました。またN23期の網中俊之さんにも参加いただき、元気に楽しくプレーしていただきました。プレー終了後、倶楽部ハウスにて表彰式と懇親会が執り行われました。優勝はN4松野省三さんで、アウト53、イン55、グロス108、ハンディキャップ36、ネット72.0の成績でした。

成績上位者は5EベスグロはE12の高尾吉宗さんで、アウト43、イン42、グロス85の見事な成績でした。

毎回各方面から支援をいただいておりますので、ここに紹介と御礼を申し上げます。

関西支部長 E16 稲岡 秀昭

ロマン会様、坂本善正さん(E14)からは多額の寄付、余田光男さん(N5)からは有馬大黒屋佃煮、三浦敏夫さん(E1)からはMCCカレーセットをそれぞれ格安の価格で提供していただいております。ありがとうございます。

また、天野俊夫さん(E5) 赤井勝義さん(E12)には背広幹事として、朝早くから受付、写真撮影、懇親会の段取り等手伝っていただきました。ありがとうございました。

来年は9月28日(木)(調整中)に垂水ゴルフ倶楽部で開催を計画しています。同窓生の皆様の多数の参加をお待ちしております。



海神会同窓会事務局の案内

2017年2月吉日

神戸大学海事科学部同窓会 海神会会員の皆様へ
海神会会費納入のお願い

卒業生の皆様、益々のご健勝、ご活躍を心よりお慶び申し上げます。また、在学生の学生会員の方々も平素より海神会の活動に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

海神会は、現在1万人近くの会員で構成され、会員相互の親睦を図るとともに、海事科学部・海事科学研究科の発展に寄与することを目的に各種事業を行なっています。事業内容は、同窓会名簿の管理、年1回の会報の発行、卒業記念クラス会への開催支援、海事科学部の年間行事、環境整備などへの支援、クラブ活動への支援、表彰制度のもとに海神会賞の贈呈、また全国の主要な都市に支部を設置し地域での活動の支援も行なっています。

海神会の更なる積極的な事業活動の実施のため財政基盤の強化が不可欠となっております。

下記の同窓会費及び寄付の納入をお願い致します。

海神会組織基盤の強化を図り、海事科学部および海事科学研究科の益々の発展の一助となりますように、何卒、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

記

付記事項

- ①海神会だより送付封筒の宛名シールには学籍番号や会費納入状況等が印字されています。
- ②同窓会費は、終身会費として3万円の納付をお願いしております。
- ③同窓会費は5千円単位での分納も受け付けています。
- ④同封の払込取扱票に必要事項をご記入の上、郵便局にてお振り込み下さい。
- ⑤終身会費完納の方には寄付金としてのお振込みも受付けています。
- ⑥振込みされた会費ご寄付は原則返金致しませんのでご注意ください。
- ⑦振替払込請求書兼受領証は大切に保管してください。
- ⑧2015年度に会費を完納された方に新会員証を送付しました。大切に保管してください。
- ⑨同窓会口座への振込みはATMからでもできます。

振込先：ゆうちょ銀行 振替口座 00900-5-269639

名 義：神戸大学海事科学部同窓会

(会員の名前、住所、卒業年、学科を分かる範囲でご記入ください。)

- ⑩その他、ご意見がございましたら、下記へお気軽にご連絡下さい。

海神会事務局

〒658-0022 神戸市東灘区深江南5丁目1-1 神戸大学海事科学部内

Tel&Fax : 078-431-6439

e-mail : almamata@maritime.kobe-u.ac.jp ホームページ : <http://www.fukae.org/>



海神会への寄付一覧 No.5(2016年2月～2016年3月)

27名の方から348,000円のご寄付を頂きました。皆さまのご支援を心よりお礼申し上げます。

海神会への寄付一覧 No.6(2016年4月～2017年1月)

(順不同・敬称略)

氏名	卒業学科・期	金額	氏名	卒業学科・期	金額	氏名	卒業学科・期	金額	氏名	卒業学科・期	金額
井手 祐之	E14	10	森田 良和	N18	50	佐藤 勲雄	E10	20	向井 友一	N12	10
藤原 義和	E17	5	吉川 渉	N5	5	筒井 哲	N15	10	尾形 民雄	N29	5
長野 信夫	高等商船 N45	5	國永 史郎	N26	30	中西 友則	海事科学部 05	5	湯浅 章二	E13	10
山内 良介	N14	10	村田 惇雄	高等商船 N43	10	宮田 光	海事科学部 09	5	中井 貞夫	N2	10
油谷 正彰	E2	10	水間 範夫	N13	20	須賀 弘	N13	30	笠原 健夫	N14	10
牛島 龍彌	N13	5	三隅田良吉	高等商船 N44	5	村井 五郎	N13	20	藤井 洸	N15	3
高祖健一郎	N7	5	岡安 博	高等商船 E45	5	国崎 肇	E7	3	吉川 道雄	E16	5
西原 裕人	N9	10	米田 巽	N6	10	山野 勝三	N11	10	坂本 利英	高等商船 N29 (ご次男様より)	10
宮島 照仁	E24	30	上野 行雄	N4	10	松永 尚幸	N26	10	中林 正人	E1	5

15名の方から173,000円のご寄付を頂きました。皆さまのご支援を心よりお礼申し上げます。



かもめ会清掃班活動報告

学生との合同清掃活動に過去最高の学生 72 名が参加

海事科学部内のボランティア団体かもめ会（清掃班）は、海事科学部校内及び周辺の清掃・整備を行う目的で活動が続けておりますが、本年 4 月から障害者雇用の一環として学部雇用の清掃員（1 名＋指導員）が平日清掃作業を開始し、校内全般にゴミ・落ち葉が散乱している状態が解消されるようになりました。

かもめ会清掃班は、散乱ゴミの清掃・43 号線沿いの生垣の剪定、緑地の草刈り、記念植樹スペース・養正館の除草剪定、自転車置場の整理等、活動の範囲は広範囲に及ぶもののボランティアの活動日数と会員数（7 名）が限られているため、作業効率が向上しなかったのが常勤清掃員の配置により清掃作業が減った分、機械力を使った活動に注力できるようになりました。

海事科学部内のクラブ活動所属在学が参加しての海事科学部校内の合同清掃活動も 7 年目となり、例年 11 月に実施しております。

今年はオフショア・セイリング・クラブ（O.S.C.）のクラブ副主将奥中勇太君に学生連絡係を依頼し、参加学生の募集・連絡の担当をしてもらい 72 名の最高参加者を集めることが出来ました。また海事科学部所属学生のみならず、他学部からのクラブ員も参加してくれました。

O.S.C. からは、毎年一番数多くのクラブ員が参加しており、熱心に清掃作業に協力してくれております。

またオフショアの全日本学生選手権を二年連続優勝し世界大会への出場しており、その統率力が培われていると感じておりました。

クラブ担当顧問の山下先生に話を伺うと、「大学からの費用援助が殆ど無い状況の中で、クラブ運営やヨット保管料に加えてレース出場に多額の費用が必要となるが、クラブ員が自ら協賛企業を探し出して費用を捻出しています。これも教育の一環と考えています。」との言葉に非常に感銘を受けたところです。



今年からの企画として合同清掃のメインテーマを設定しました。

（Ⅰ）二・五号館の中庭の除草・整備

（Ⅱ）運動場（グラウンド）周辺の除草・清掃

（中庭は、43 号線の騒音を避けて学生達が憩える空間として整備されたのであるが、夏には雑草が伸び放題となっていること。またグラウンドは運動クラブの対抗戦に使われたり、休日には少年野球チームが歓声を上げる場となっており、他大学生や父兄の方が多く訪れる場所であること。）

また、合同作業後は学生・OB の懇親会を開き学生・OB の交流を図っていますが、今年はビンゴゲームを採用しました。ビンゴの採用も学生達に好評で、懇親会の楽しみが増え、学生・OB の親交も更に深まり懇親会も大いに盛り上がりしました。



海神会からは活動資金の支援を受け、今回の合同清掃の費用にも使わせて頂きました。紙面を借りて御礼申し上げます。

現在の OB 会員数は 7 名です。年々高齢化により作業効率が下がって来ており、近隣の OB の参加を募っております。海神会本部又は下記連絡先までお問合せ下さい。

N 17 滝本 純治 TEL: 0799-70-1681
E-mail: jktakimoto@yahoo.co.jp

村田 惇雄様の近況 外国航路もやまばなし 第 7 回は次号に掲載予定です。

村田 惇雄様より近況報告：この 1 月 8 日で満 94 歳になりました。

至極健康です。毎日、この寒さでも約 7,000 歩は歩いております。 平成 29 年 1 月 16 日

平成29年度海神会理事会・総会・懇親会の日時、場所が決まりました。

日 時：平成29年5月27日(土)

理事会会場：総合学術交流棟梅木Nホール、14:00～15:00

総 会 会 場：総合学術交流棟梅木Yホール、15:00～16:30

議 題：平成28年度収支決算、平成29年度予算、
役員交代、活動報告など

懇 親 会：総合学術交流棟梅木ホール、16:30～18:00
尚、当日は深江祭と同時開催です。

参
加
申
込
先

同窓会総会及び懇親会に出席される方は
FAX 又はメールにて

ご連絡いただきますようお願い致します。

TEL/FAX : 078(431)6439

E-MAIL:

almamata@maritime.kobe-u.ac.jp

平成29年度 第12回ホームカミングデイは10月28日(土)です。

海神会評議会も上記と同会場にて当日13:00～14:00を予定しています。詳細は追ってお知らせします。どうぞ、ご参加ください。お待ちしております。

(表紙の写真：昨年、海洋底探索センターが行った鬼界カルデラ海底調査で鹿児島港に寄港中の深江丸)